

## 祝杯

泉鏡花作

一

「北溟に魚あり、其の名を鯤といふ、鯤の大なる其の幾千里なるを知らず、」とモオニング・コオトの膝に手をつき、片手の手巾で唇の邊を拭ひながら、突如として説き出した。新橋プラットフォウムの樓上なるビイヤホルの中央室、白の蔽の、清く且つ美しき一脚の卓子を、五脚の椅子、同一人数で領した中の、一名の人物、柏崎信一といつて火災保険會社の社員であるが、眦の切れ上つた瞳を据ゑ、此の時屹となつたので、一同ナイフの手を留め、硝子杯を差措いて、齊しく其の眞面目なる顔を贖めた。最も近く椅子を並たのが、新聞記者、松田正三郎、秋の末頃なれば未だ外套を着に及ばず、酒も足りないから薄着の寒さうなのが、些と鐵拐に見えたが、振向き、

「大分喧しいね。」

柏崎は益々沈着なる態度を以て、

「然り而して、東海に魚あり、其の名を蝦と謂ひます。」

「え、」と一人驚いたものがある、是は大學の制服を着た青年で、藤岡主税といふ、柏崎と的面に差向ひで居た。

其の時説く者は肩を聳かし、體を斜にして、手巾を左の衣襖に押込むと、靴をポカリと遣つて、反つてた胸をぐツと卓子に押着けて、五皿一様一様に並べた料理の、我が前なるに指をさし、

「此處にあるのが、其のフライさ、即ち蝦のフライさ、」

「何のこつた、」と同一ことを新聞記者松田と、殆ど同時に同音にいつたのは、樓の入口を背に、卓子の横の方、左の一方を占めた、子爵橋家の貴公子である。

「で、僕は之を食べるのであります、」と柏崎は大業に俯向様に口を差寄せて、豫め心懸けたものと見える、可い加減にこなして置いたのを、フオーク

の尖さきにかけて、手際てぎはよく一口ひとくちにひよいとして遣り、  
「旨うまいよ。」とけるりとする、何事なにごととも知らず唯ただ  
見て居た一同どう、此この體ていに皆みな苦笑くせう。

「些ちと廻まはつたさ。」

「むゝ。」と頷うなづいて、記者きしゃと學生がくせいは目配めくばせをした。

「見給みたまへ／＼、ブランデーの猪口ちよくを二杯はいとも空からに  
した、唯ただ十分ぶんの間あひだだよ。」と子爵しやくは金時計きんどけいを一寸ちよいと  
見みる。

「諸君しよくん。」

と此時このとき柏崎かしはさきはすつくと立たつて、椅子いすを離はなれ、

「諸君しよくん、然しかるに此處こゝに、此この蝦えびなるものを食しよくし能あた

はぬといふ男おとこがあります。」

記者きしゃ、

「あゝ、其そのの事ことか。」

「何だ、其そのの事ことか。」と子爵しやくも莞爾にっこりする。

柏崎かしはさきは其そのまゝ又腰またこしをかけて、呵々から／＼と笑わらひ、

「ね、何どうです、私わたしはオムレツにするツさ、私わたしは  
オムレツを食たべますとさ、卑怯ひけふみれん未練だ。」

「こら／＼、鳶口とびぐち。」と耐たまりかねて口くちを挟はさんだの

は卓子の右の一方に控へた、西洋畫家紫派の一員で、  
守山禰吉、即ちオムレットを食する人物。

「何だ、鳶口？」

「君のことだよ。」學生が註を入れる。

「はゝあ、鳶口か、何か、俺が江戸ッ兒で喧嘩ッ  
疾いといふことか。」

「迂遠なものだね、鳶口と謂へば江戸ッ兒で喧嘩ッ  
疾い、道理こそ守山がフライを食はぬといふことを  
饒舌るのに身振聲色を遣つた。」

「何が迂遠だい。」

「栢崎、然う深く考へないでも可い、火災保險だ  
から直ぐに鳶口ぢやあないか、」子爵が記者の言を  
引取る。

學生が傍より、

「皆、蔭で然ういふよ。」

「面と向つてさへ言はア。」と栢崎は呟いた。  
畫家は大に其の意を得たるものゝ如く、

「然うさ、北溟に鳥あり、其の名は鳶口。」

柏崎は屹と睨めつけ、

「何をオムレツ、口惜くば蝦を食へ、是を食はな  
いものは天下の豪傑でない。ねえ、諸君、これ、皆  
うむと言へ。俺の言葉を信じないか、誰だと思ふ。」  
「鳶と思ふよ、北溟に鳥ありさ、其の名を鳶といふ、  
鳶の大袈裟、其の幾層倍なるを知らず。」  
「黙れ、黙れ、蝦を食はずして何ぞ。」

「待ち給へ、守山君が蝦を食へないの敢て其の味  
を美ならずと為さず、其の形を蟲なりとせず、其の  
肉を毒なりとせずだけれども、西洋畫を描く癖に恐  
しく國粹保存で、女子の服装の如き、就中當代の海  
老茶袴なるものを嫌ふから、其處で食べないんでせ  
う。」と學生は温乎として其口髭を捻つて言つた。

守山は額に手をあて、

「敬服々々、藤岡は僕を知るものだ。」

「何を！此奴等。」とばかりて柏崎はビールの  
大硝子杯を仰いで、ごツ／＼と一呼吸つく。

と記者は頼杖しつゝ、あいた手の指の尖で硝子杯の縁を軽く叩きながら、

「よし、蝦はまあ其にもしませう。私は別に梯子を擔いで鳶口の肩を持つ譯ぢやありませんがね、守山氏の卑怯は、敢て其に限りません。此間一處で、守山氏と子爵と私と三人で會しました、其時ねえ、子爵。」

「素破抜きかい。」と莞爾する。

「時正に兵を出すに妙でさ。處で一品出たものがあります。鳶口さんの言種ぢやないが、こゝにタンスチウと言ふものがありませう。」

柏崎は咽を鳴して、

「北溟に魚あり、其の名をタンスチウさ、むゝ、ある、ある、あるとも！」と續けざま。

「御存じの牛舌、いふまでもありません、牛の舌の旨煮さね。」

「解つたよ／＼、解りましたといふのに。」と守山は目を反した。

「然もトマトを調味して、樺色にとろりと出れました。先生半分ばかり退治たがね、變な顔色で、ナイフの平で件のとろ／＼を掻き退けて、之は何だと尋ねます。牛の舌と言ふとね、ふ／＼、」

「露と答へて消えなましものを。」と子爵はナイフを差置き、背ざまに椅子に身を凭らして、腰の衣襖に兩手を突込み、其の秀麗なる顔を上上げて、守山を熟と見る。

「先生、些と驚いた色のある處へ、子爵が警句を吐きました。先生之を召食るのは、宛然牛と接吻をするやうなものですツさ。」

柏崎は聞いて大得意、故と外方を向きながら、守山の背中をどんと一つ。

「其處で先生泣くにも泣かれずか、大奇談。」

「北溟に奇談あり、牛と接吻ぢやあないか。」

「本當に其の時の顔色ツたら、藤岡さん君にも見せたかつたよ。」

藤岡主税は先刻から、人々の顔を樂しげに見て、  
卷莨を燻らせて居たが、火皿の上へ靜に置き、  
「否、ものには好嫌があるものです。猛獸毒蛇に  
驚かぬのが、芋蟲に恐れたり、蜥蜴を嫌つたり何か  
する。其も、芋蟲や、蜥蜴は然もあるべきですが、  
現に蟬を嫌ふものがある。食物の好嫌も味には寄り  
ません。タンステウは、恚くいふ拙者もあやまり  
ます。日の丘やこがれて熱き牛の舌ね、心持が悪い  
ではありませんか。」

守山は衝と身を起して、赤い鼻緒の上草履で、つ  
か／＼と寄つて、

「藤岡！ 握手。」といつて左の手を。藤岡も微  
笑みながら、右の手を上下に三ツ振つた。

「呀！ 羨望、羨望、僕も一つ、」柏崎は、忙し  
く卓子の眞中へ、掌を縦に、額に當て、衝と藤岡に  
差向けた。

此方は故とらしく頭を掉つて、  
「意氣相投じなければ不可ません。」

柏崎は一寸四邊を見て、

「藤岡、外に客も居る、何か君に嫌はれたやうで、

甚だ見つとも好くない。お手軽な處で、是非頼む。」

「否、成りません、お手軽などゝは益々以て怪し

からん。」

「畜生め、賣ツ妓の氣で振りやあがる。癩に障る

が、外聞が悪いからよ。」

「北溟の魚大惰氣の體さ。」と守山は座に歸つた。

「覺えてろ／＼、猶以て甚だ、之は、是非、これさ、

何の事たい。」

中腰で、卓子に蔽はれかゝつたまゝ、大にまごつ

く。

記者傍より、

「何ぞ、意氣相投ずることにしたら可いでせう、好

きとか、嫌ひとか言ふもので。こんな又手取り疾い

投じやうはありません、一寸御相談をなさい。」

「だから迂遠だといはれるのだよ、疾くやれ、鳶口、」と子爵も興がつて口を添へた。

「婦人々々、さあ江戸ツ兒は氣が疾い、これなら申し分はあるまい、怪我にも嫌ひだと吐して見る、何うだ、美人は。」といったが、フト氣が差したか、立直つて、柏崎が振り返る、背後の方に紅の窓かけの、一際電燈に照り添ふ處、大輪の菊の花瓶を中に、相對して、人品の好き老人、孫か、未の女かと見ゆる、年紀十七八の女の、高島田に、プロシヤンの濃いお納戸の肩掛をした、姿見よげに、打上つて品の可い、氣高いのと二人居て、睦じげに、且つ樂しげに支度をするがあつたゝめに、フツと口を噤んだが、まじくなひに大硝子杯の飲さしを倒に傾けて、  
「ポオーイ、大を五個、待て、天下分目になつた、さあ、芋蟲！」と調子高。

聞えたか、別なる卓子に一人、件の令嬢と背中合せに飲んで居た、陸軍の中尉が、思はず振向く満面に笑を湛へて居る。

トタンに三人づれで急ぎ足に入つて來た商人風の二人づれで、次の室へ入り際、小耳に挟んで、一寸

立ちどま  
立停つたのである。

折をりから硝こつ子つ杯ぶを持もち出だした、小使ポオィも又また以前いぜんから様やう子す  
を心得こころえたと見みえて、くすり／＼。

柏崎かしはさきは又また一盡さんおほあふ大呻あふりに呻あふつて、

「さあ、一大事だいじ、芋蟲いもむしは何どうだい、よう、藤岡芋ふぢをかいも  
蟲むしで一つ折をり合あへよ、後生ごしやうだからよ。」

藤岡ふぢをかは泰然たいぜんとして敢あへて動どうせず。

「強しひつけたつて、不可いけません、先方せんぱうが、ヤケに  
嫌きらひなものでなくつちや駄目だめでせう。」

「蠅まむしは何どうだ。」

「否いゝえ。」

「忌々いまくゝしく持もたせやあがる。」

「何なに、私わたしは決けつして己おのれを欺あざむきません、蠅まむしは好すぢやあ  
りませんが、何どうも守山君もりやまくんの牛うしと接吻位せつぶんくらゐには参まぬ  
りませんか。」と落着おちつく。

愈々いよゝゝ急せぎ込こみ、

「うはゞみか、些ちと滑稽こっけいだな。虻あぶか、いけない。

蚤のみか、いけない。蚊かか、えゝ、ぼうふら。」

「變化極りなし、うはゞみから、子々になつた。」  
「天上すると、龍に化けるよ、」と子爵も口が悪  
い。

「柏崎、北溟の魚にしないか。」

「無念骨髓に徹するが、先刻何とやらして何とか  
好嫌ひが何うとかがいつたな。待て、むゝ、蜥蜴々々！  
蜥蜴で負けてくれ、あゝ、草臥れた。」

とゞつかり腰をかけて、

「それとも守宮かい。」

藤岡は未だ顔かないのに、却つて守山が腕をさし  
のべ、

「柏崎怨は怨だが道は道だ。公明正大、僕は其の  
守宮で一つ握手をしよう、聞いても身震がする。」

「謝す！」といつて大呼吸をついた。今は早や敵  
をも頼むばかりとなつたか、手を緊めながら、慨然  
として、

「廂合ぢやああるまいし、守宮の道もないもの

だ。」

一同は哄と笑つた。

子爵はしなやかに手を伸べて、

「私は其の虻で行かう。」

記者が引續き、

「お次手に蚊を握り殺さう。」

#### 四

餘念よねんなげに、恚いかく睦むつみ合あふ四人よんにんを見て、嬉うれしさうに、然さりながら、敢あへて同意どういの色いろを表あらはさない、藤岡ふぢをかの秀ひいでた眉宇びゆうの間かんを、稍や落おち着ついて、柏崎かしはさきは瞳ひとみを定さだめて、何等なんらか其その意いに投とうずべきものを認みとめんとしたのである。

「しかし人事ひとじつぢやありません、恚かう四人よつたりとも折合をりあつたものを、藤岡ふぢをかを口説くどき落おとせないのは、餘あまり手てが無い。」と記者きしゃは眞面目まじめに謂いひ出した。

「だから、北溟ほくめいの魚うをが可いいな。」

「控ひかへる。」といひながら、じつと藤岡ふぢをかを瞞みつめた目に、笑あはみを湛たへたが、見みる／＼破顔はがんして、又また彼の膝ひざに手てを置おいて、斜しやに構がまへ、

「そんなら、藤岡ふぢをか、今日けふの婿君むこぎみは何どうだ。」

「何なに、今日けふの婿むこ。」

「佐賀さがのお照てるさんの良人りやうじいだ。即すなはち我々われが此處こゝに來きて、午後九時半ごよの興津行おきつゆきの汽車きしやで、今いましがたその新ホ婚旅行ネムを送おくつた人物じんぶつよ。」

藤岡は少時黙つたが、

「多田道雄か。」

「氣障な奴だ。」

と答ふる端に、決然として、

「可し。」

「妙だ、是非占めよう。」と記者と一所に手を占めた。

「むう、衣服の改良を唱へて、我が國の女子に朝鮮の官妓見たやうなものを着せようとする奴だ。此方からも出掛けよう。」と故々立つて、歩み寄つて、守山も手を取つた。

「小紋縮緬の衣服を着て、朴の木齒の日和下駄を穿いてる男さ。勿論行かう。」と子爵も同一意である。

さて皆顔を見合せた。

柏崎は膝を叩き、

「失戀々々、これがために守山は田舎へ引込まう

といふし、子爵はラセラスを極めようといふ、これ

は又臺灣へ行かうといふのか、藤岡なんぞ、南亞米

利加へ探険に行かうと言つた。いや、はや！」と大

欠伸をする。

「お言葉の中ですが、尊公は、」と記者が、膝をついた。

「僕は何、淺間山の神主に成らうと思つた。」

「いや、暢氣なもんです。」

又哄と笑ふ。

「然し、一人として當つて見たものはあるまい。

何、柏崎だつて、子爵だつて、憚りながら、此處にある者さ、忍びの緒を切つて出れば可かつたに、いづれも澄すから豎子が手にしてやられた。外聞の悪い。失戀などいふな。口説けば必ず用ゐられたさ。」

「何しに以て然るべき。」と柏崎は腕を組んで、

「遠くこれを意中の人に求めんより、近く隣席の御老體に聞いて見る。あれなる令嬢を嫁したまふやうなものは一人居ない。」と先刻は、口にするのも憚つたが、硝子杯の數を重ねたれば、氣焰萬丈。

「たゞし、諸君其の良人を、あしざまに言つて、徳義に對して恥んでも宜いか。」と藤岡はフト溜息

を吐いた。

柏崎は言下に、

「宜しい、敢て構はん。」

「いや、藤岡の意味は、然うでない。兎も角も其の良人たる多田を罵つて、彼の人に對して濟なくはないかと言ふんだ。」

「勿論、今ぢや、其の幸福を祈るばかりさ。」

と一人がいつた。

「亭主は亭主、美人のためには心から其の結婚を祝するんだ。可からう、お照さんは實に祝すべし、だが、亭主は馬鹿だといふ事よ。」

「尤も蜥蜴、守宮のはじめから、ものゝ道理上から立つた議論ではないのです。」と柏崎は沈着に。

「理非明白。」

「ぢやあ、奴を占めたかほりに、好悪の感情の、今までは悪の方だった其の反對に、今度は好い方を行つて、眞心を捧げて佳人の健康を祝し、且つ其の幸福を占めようではないか。」と柏崎がづかと立つ。

「賛成。」の聲、口々也。

「お待ちなさい、しかし同一握手の手段を以て為ては、此際些と情を表するに足りないやうです。」

と藤岡ふぢをかが言いつた。

「諸君しよくん、祝杯しゆくはいを上げませう。」と其美そのうつくしき頭髪とうはつも、  
やゝ亂みだれて、紅顔こうがんの公子こうしも陶然たうぜんたる風情ふせいである。

「ぢやあ、杯なかつきを改あらためて、」

「満々まん／＼と五個いつ／＼の硝子杯こつぶを。」と守山もりやまが手てを鳴ならした。

やがて、水晶すいしやうに雪ゆきを削けつつて、橙黄色おれんぢいろの眞心まごころを湛たへ  
たのが、手てに、手てに、手てに、丁ちやう、丁ちやう、丁ちやう、丁ちやう、丁ちやうと  
合あつて、颯さつとばかり、姿正すがたたしく満まんを引ひいた。餘あまの事こと  
の見事みことさに、事ことの半なかばより傍目わきめも觸ふらず五人にんに見惚みと  
れて獨笑ひとりゑみした、隣席りんせきなる老人らうじんの、思おもはずはたと手て  
を鳴ならすに連つれて、獨酌どくしやくの士官しくわんも又また拍手はくしゆ。

【完】